
sevenstar's

やなぎりつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

seven stars

【Nコード】

N0717T

【作者名】

やなぎりつ

【あらすじ】

10年前に出来そこないといわれ勘当された主人公の涼が学校とかでチートを出しまくっちゃう感じの小説です

ブログ(修) (前書き)

不定期更新なので長い目でみてくださ
い
お願いします(ゝ；ω；ゝ)

プロローグ（修）

「この出来損ないが！！」

親父が俺に向けて言ういつもの口癖だった

俺は幼いながら親の期待に答えようと頑張って必死に魔法の訓練していたけれど

初級魔法も使えないダメなやつだった

だから俺は武術だけは必死に頑張った

死ぬ気で頑張ったおかげで

剣術、棒術、槍術、拳術、気術を習得することができた

そっちに関しては才能があったみたいなんだけどな・・・

魔法絶対主義の親父はそれでは許せなかったみたいだった

俺の家系は昔から炎の魔法を扱う由緒正しき貴族の家らしい

親父は自分を超える才能を持つ子どもが欲しくて

お袋と結婚したらしいができた息子が何も出来ない屑で

いつもお袋にあたっていた

まあ、あれだ

親父は典型的な権力主義

この日本では実力が全て

だから、俺を最強にして地位を上げて

とかくだらないことを考えていたんだろうな

その後弟ができ弟は天才とかくだらない感じに育てられて
将来はsevenstar's入確定などと言われている

sevenstar'sは簡単に言うと王を守る騎士だな

そんなモノになってどうするのかと俺は思う

けして妬みや僻みではないよ？ほんとだよ？

そして俺は10年前緋炎家の恥と言われ勘当され
分家の朱見家に引き取られた

1話（前書き）

かなり短いです

1話

ここに帰ってくるのは10年ぶりか・・・

この街にはいい思い出がないからな

来たくなかった・・・いくら仕事だと言ってももっと他の人がいたんじゃないのか？

と俺は思う

実家に行ったって碌な事にはならないだろうけど

配属されたからには挨拶いかないとだめだよな・・・

あのクソ親父はぶっ飛ばしてえー

あと糞野郎 弟の迅もぶっ飛ばしてえ

あいつ俺をゴミのように見てたからな

武術じゃ勝てないからってよ

意味分からんわ・・・魔法があるだろうによ・・・

しかし、神の悪戯としか思えないよな・・・

なんで配属場所がここなんだろ

やっぱ紫音さんがなんかしでかしたとしか思えないや・・・

でも、最近妖怪だとか魔物だとか多いっていうしな

糞親父たちはなにしてんだよ

とりあえずは家に向かうしかないか・・・

俺は諦めたように元実家へ向かった

2話（前書き）

頑張ろう
暇だしね

2話

「御免下さいー」

俺はただいまとは絶対に言わないこの家が大嫌いだから

奥から「はいー」と声が聞こえた
たぶんお袋だろう

「どちら様で？って・・・涼？涼なの？会いたかったわ!!」と
抱擁してくる

別にお袋は嫌いではない

いつも俺をかばってくれた勘当される時だってそうだった
必死に止めてくれたけど糞親父には逆らえなかったみたいだ

「でも、なんで帰ってきたの？あなたこの家を追い出されたのに」
「糞親父と糞迅が仕事してないみたいだからここに配属されたんだよ・・・」

俺だって出来ればこんな所来たくなかったわ」

「お父さんと迅を庇う訳ではないけれどあの人達はちゃんと
お仕事してるわよ？ただね・・・数が多すぎるのよ・・・」

「なんだ天才とか言われてる迅がいても処理しきれないのか、だらし
ない

どうせ、まだ自分が井の中の蛙だって事に気づいてないんだろ？」

「まあ、あの人が厳しくも甘やかし過ぎて育てちゃったから・・・」

「話はこれくらいにしておいて糞親父いるか？」

「奥に居るわよ。居間で待ってなさい呼んでくるから」

そう言われ俺は居間に向かい親父が来るのを待った

親父は居間に来るなり俺を睨みつけ

「なぜ帰ってきた！誰が敷居を跨いでいいと言った！！さっさと帰れこの出来損ないが！」

と罵詈雑言を浴びせてきた

「まあ、落ち着けよ糞親父。俺も来たくてきた訳じゃねえーんだよ」と来た経緯を親父に話すと

お前が？ありえないみたいな顔して

「お前の力を借りることはまずないだから帰れ」といい居間から出て行った

そして俺も話が終わったと思い

こんな家からすぐにいなくなりたいので帰ろうとお袋に声をかけると

「夕飯食べていけばいいのに」などと言うが

あの親父と顔を合わせて飯を食うなど反吐が出そうなのでタッパーに詰めてもらい

以て変えることにした

10年ぶりのお袋の手料理に俺はちよつと嬉しくなった

マザコンじゃねーよ？ほらお袋の味ってなんかうめえーじゃん？

最近レトルトかビニ弁だったからこう言うのが食いたかったんだよ！作れるんだがめんどくさすぎるんだよ・・・片付けとかね

玄関でお袋に気が向いたらまた来ると伝えると同時にドアが空きヒネクレ性格の迅様が御帰宅なさった

「誰だこれ、と思ったらゴミで恥のお兄様ではありませんか（笑）」

やべえー（笑）うぜえー殺してーやっばコイツ

「なんで此処にいるんですか？クズを見てるのは不快なのでさっさとドコかにいってください」

「ああ、あと武術で僕のことを倒そうとしても無駄ですよ？昔と一緒にしないでくださいね」

「今の僕ならあなたみたいなゴミ左腕だけで倒せるはずですから」

とおれつえーぞみたいなこと言って部屋への向かっていった

俺は玄関から「ああーいいこと教えてやるよ、俺お前とおなじ学校に通うことになってるから

明日からよろしくなー」と空気を読まない発言をしておいた

すると迅が「なんでお前みたいなやつがああ学校に入れるんだよ！」と

部屋から出てきて叫んだ

俺は無視して元実家から出て行った

3話（前書き）

実を言うとこれもプロットなかったり（^| ^;）

3話

次の日

目が覚め初登校だと言う事を思い出し

俺は支給されていた

学園指定の制服に着替えた

「初登校自己紹介どうしようかなあ」
とかつぶやきながら学校へ向かった

ここは国立東京魔法学園

簡単に言うと魔法の天才とかが集める学校

最低魔力が2000以上ないと入れないらしい

2000って言うのは一般人が100だとすると

その20倍もうなんつかエリート連中の集まりだ

魔力だけは（笑）

あと魔法にはそれぞれ属性があり

炎・水・風・地・氷・雷・光・闇

これが基本元素

言っても光と闇を使えるのなんて1000人に一人の割合なんだけ
どな

通常使えるのは1人につき1元素

まれに2つや3つ使える奴も居る

これはいわゆる本当の天才だな

そういう奴は結構妬みの対象になったりする
天才と周りに持て囃されていて
いざ学校へ

自分は一般人と変わらないみたいな感じで
本当に大海を知らない蛙ばかりで困るわ

そんなこんなで到着だ

とりあえず職委員室に向かうか

職委員室につき俺は

「すいません、今日転校してくるようになってる朱見涼ですけど」

と近くにいた先生に話をかけてみると

どうやら担任だったらしく

「おお、君が朱見くんか待ってたよー！噂聴いてるよー」

俺は苦笑いしながら「そのことは誰にも言わないでくださいね？」

「うん、うん、わかってるよ。それと私は担任の霧島八雲、よろしくね？」

「よろしくお願いします」

と挨拶を交わし俺と先生は教室に向かった

「ここが私の受け持つ2-Cクラスですー。じゃあ、ここでちょっと待っててね」

と言われちよつとすると

「朱見くんはいつてきてー」と声が聞こえたので

俺は教室に入っていた

中に入り簡単な自己紹介をして
後ろの方の席に座った

隣からいきなり

「朱見くんよろしくね！私は霧島和葉あのダメ姉の妹です」
と苦笑いしながら挨拶してきた

これが彼女との初めての出会いだった

4話（前書き）

感想ありがとうございます（；ω；）
頑張っていると思います

やっぱりプロット書いてみて思いました
大事だな。。。と・・・

4話

和葉が学校を案内してくれることになった

この馬鹿広い学校の広さを簡単に表すと東京ドーム4つ分
意味のわからない広さである

この学校は大きく学科に分けると
実技学科、研究学科に分かれる

さらにそこから実技学科では
属性に分かれ＋召喚魔法（式神も含む）
に分かれる

研究学科も実技と同様

だから、こんなに広くなるんだよ・・・

そんな俺は実技学科の氷に入っている

この学科は選択科目と思っていていいと思う

和葉が保健室や実技施設などを案内してくれる途中に
あの糞野郎と出会ってしまった

「兄さんあまりうるちよろして僕の視界に入らないでくれない。イ
ライラするんだ」

「出会ってそうそうご挨拶だな」

「本当に入学できたんだ。なんでこんなグズが入学できるんだ…この学校は大丈夫なのか？」

などと頭を抱えてぶつぶつ言ってるのをめんどくさくなり無視して歩いて

案内を続けてもらった

「ねえーねえー朱見くん？ 緋炎くんの兄さんって発言どういう事なの？」

聞かれたくないことを聞かれてしまったな・・・

「実は俺緋炎家の長男なんだよ・・・まあ、魔法の才能がないって言われて勘当されたんだけどね」

「そっか・・・ごめんね、言いづらいこと聞いちゃって」

「え？ でもこの学校に通えるってことは魔法使えるんだよね？」

なんの属性の魔法が使えるの？ ちょっと学生証みせて！」

そうこの国立東京魔法学校は生徒手帳にはある程度の情報が書いてあり

使用可能属性も記されている

俺は断るも和葉は「見せてー見せてー私も見せるからー見せてー」とあまりにもうるさい為和葉のを最初に見せてもらった

魔力は6312かこれ普通の3倍だぞ

ちょっとなめてたわ

和葉の魔法属性は風か

性格が出てるな・・・属性で性格診断みたいのを俺は作ったことがあるんだ実は☆（ゝω・）v

簡単に書くと

炎は熱血馬鹿 実力主義

水はお淑やかで清楚

風は明るくてうるさい（あ

地は縁の下の力持ち的な？小説なんかで実はかっこいいサブキャラ

氷は冷静沈着 ロボットみたいな？

光は聖人君子

闇は合理的判断しかない奴

みたいな感じだ

これはほぼ90%以上の確率で当たっている

閑話休題

俺のカードは少し偽装して和葉に学生証を見せた

「朱見くんって氷と水属性つかえるんだーすごい！でもなんで最初嫌がったの？

2属性なんだから自慢すればいいじゃん！」

「それとも魔力が2264って標準だからちよつと恥ずかしかったのかなあ？」と

ニコニコしながらこっちをみていた

俺はそっぽ向いたまま前へと歩き出した

あらかた周り終わり外は暮れている送ってあげることにした
下駄箱へ向かっていると和葉の姉の八雲に出会った

「おお、朱見くんやるねえ、入学そうそううちの妹を落とすとは流石だねえ」

「先生そんなじゃないですよ・・・たまたま席が隣になって学校案内してくれてこんな時間になったんでおくっていくことになっただけです」

と茶化し気味の先生を適当にあしらって
帰り道にを歩いていると後ろから先生がやってきて
霧島姉妹と一緒に帰ることになった

しばらく歩くと嫌な感じの空気が漂っていた

先生が妖が近くにいると言った

逢魔が時つまり夕方は妖怪などの魔物が活発に活動する時間だ

先生は僕達を逃がそうと走ったが走った先に大百足がいた

大百足は口から毒を吐いてきた

俺達はなんとか躲すもその毒が蒸発してあたり一面に毒霧が充満していた

先生は俺と和葉に結界を張り大百足と対峙しているが

大百足と魔法の相性が良くないらしく芳しくない

俺は結界を出ようとするのと和葉に「朱見くんが言っても足手まといになるだけだよ。」

お姉ちゃん私よりも魔力も多いし強いからきつと大丈夫」などと言っているも体が震えている

震えて当然だろう強がっていても大百足には全然ダメージを与えられていない

俺は和葉に「まあ、見てろってあんなの3秒で終わるからよ」

といって俺は結界の外にでた

「朱美くんやっと手伝ってくれるんですか？先生もう少して死んじやうとこでしたよ？」

「やっぱヒーローは遅れて登場しないとだめじゃないっすか」

俺は出来れば魔法を使うところを見られたくないから身体強化の魔法だけ使って大百足に拳術式式裂破を放った

大百足の体の一部は吹っ飛んだものの致命的にはならないみたいだった

やっぱでかいしそれなりに強い妖怪だからこれくらいじゃ死なないかと俺はブツブツといい魔法を使う決心をした
でもやっぱ見られたくないから・・・

「時の神クロノスよ我汝の血族血族の盟約により時を止めよ」
時間が止まった世界

俺だけが動けるこの世界で
俺はさらに「太陽と月を飲み込み世界を終わらせんとしたスコルよ、
我は古き血の血族盟約により
我に前に存在せし敵を飲み込め！」

スコルは盟約により大百足を飲み込みクロノスの召喚を終わらせ
時間が動き出した

「和葉は何があつたの？あれ大百足は？」と
疑問を俺に投げかけてきたので適当に倒したといい流した

「流石朱美くんね。blackstar'sの称号は伊達じゃない
ってことね」

「先生それは内密に・・・そのことは学園長と担任のあなたしか知らないことなんですから」
と八雲に一生懸命口止めをした

後ろから和葉が「なんお話ししてるの？私も混ぜてよ」と入ってきたため

俺は2人を置いて走って自宅のマンションに帰っていった

5話（前書き）

なんかいろいろと血迷った気がします・・・

5話

大百足を倒してから翌日

突然八雲が「明日は模擬試合があります。いえーい！」
とか言い出した

俺は「先生・・・なんで前の方にそういう大事なコト言うの・・・」

すると八雲は

「ごめん、忘れてたの（はあと）」

「そうか、人間誰だって忘れるよな。うん、しょうがないよな」

「あれ・・・はあとに突っ込んでくれないの？こんなにも
私涼くんを愛しているのに・・・」

俺は八雲を無視して

「その模擬試合に決まったルールとかあるんですか？」

「あぁん・・・冷たい涼くんも素敵・・・」

八雲っていつの間にこんなキャラになったんだ・・・

でも、昨日の帰り道後ろから涼くんと結婚すれば安泰とか
言うのが聞こえた気がしたな・・・

おー怖い怖い、並べ句かわるの控えようかな・・・

「涼くんはあとで私の実験室に必ず来るように。で、ルールだけど簡単に言っちゃえば殺さなければなんでもだいじょうV」といってこの女ピースしてやる

なんかかわいく見えた・・・俺毒されてきてるのかな・・・
これが・・・恋？

ありえないわーだったら和葉のほうが・・・って
似たもの姉妹だった！！

「先生！！愛してます。結婚しましょう」
とちよつとかっこつけて言ってみたと
すると

「わかったわ、じゃあ、これにサインして、もう涼くんの名前と
判子押すだけだから」

「え、え、え、え、え、こわ。なにこのホラー」

何で親の項目の所も書いてあるの・・・しかも、ちゃんと親父の字
だし

まじ怖いわ・・・

「先生、あと50年たっても好きだったら結婚しよう」

「ええー、わたしいまがいいーいまがいいー」

「やっぱこういうのはもつと雰囲気のある所で
もう一回言うことにするよ」

たぶんもう一生言わないと思うけど

「あとこの婚姻届貰ったときですね。次僕が言うときに
指輪と一緒に渡すんで」といって俺炎の魔法で燃やした

すると先生は鞆からもう一枚取り出した

なんてことでしょう。まさか同じものがもう一枚存在するなんて
信じられません。

「なんでもう一枚持ってるんですか・・・？」

「え？ 予備（はあと）」

この人もしかしたら隠れヤンデレからも知れない、気をつけよう

「そのことは置いて置いておいて。もう。試合の説明してください」
と俺が言うとクラス全員からお前が振りまいた種だろ
と言わんばかりの視線がとても痛かった

「え？ 説明したじゃん？ 何言ってるのもうしょうがないな涼くん
は」

俺はもう諦めたように「はあ、わかりましたんで授業始めてください」

と渾身の諦め具合を込めて八雲に言った

すると八雲はブツクサといいながら授業を始めた

授業が終わり

八雲が此方を仲間にしてほしそうに見ている

おかしいな肉を与えてないのに

何故だ！

思い出してみるとHRの時に

あとで実験室に来るように言われてるんだった

いきたくねえーいやな予感しかしねえー

なんかこつちめっちゃくちや見てるよ
しょうがない、諦めて行くか・・・

「先生、行きますか。」

「ほらこれ持ってさっさと歩く!」

と八雲はいい俺に腕を組んで歩き出した
この状況いろいろ拙いんじゃない?

とか思いつつも胸が当たってラッキーとか
思ってる俺もいた

童貞なんです。サーセン

「ねえ、涼くん?」上目遣いでこつちを見てくる

「え、何、このかわいい生物」

しまった口に出してしまった

八雲は「えへへ、涼くんが可愛いだって(キャハ)」

となんか馬鹿ツプルぽいコトをしながら
歩いていると

八雲の実験室に着いた

中に入るとコーヒーを入れてくれた

俺はそのコーヒーに口を付けた

「飲んだ? 飲んだ?」

八雲がしつこく聞いてくる

「飲んだけどそれがどうした?」

「そっか。なんか体が熱くなってこない？」

はてやこれは、よくある媚薬でにやんにやんさせちゃうとか奴じゃないのか

ちなみに俺に毒の類は効かない薬も効かない漢方なら効くけど俺は常に気術で気を循環させているため毒素は全て排出される

でも、かわいそうだからのっていつてあげるか

「せんせい・・・からだが・・・はあ・・・
あついよ・・・はあ・・・はあ・・・」

「なにこれ・・・はあ・・・はあ・・・」

やべえ・・・何これ恥ずかしい
乗るんじゃないかと後悔する

八雲はくっくくくと変な笑いをしながら手錠を持って近づいてくる

「これで拘束して涼くんと既成事実作って結婚だあ！」
さすがに手錠付けられたりするのとは趣味じゃないから俺は手錠を奪って八雲を手錠で拘束する

八雲は「あれ？媚薬の効果は？あれ？あれ？」
などと困惑してる

「俺にそんなもん効くわけないだろ」

「なんで？さっき効いてたじゃん」

「ああ、あれ演技ね？」

「でも、この状況本当にしたくなってくるな」

「教室でも言ったけど結婚してもいい、しかしだ、この国は一夫多妻制だ、俺は確実にお前以外も娶るぞ？それでもいいのか？」

そうこの国は魔法の才能が一定数超えているとその才能を次にも受け継がせるために複数の女性を娶らなくてはならない多夫一妻制も存在する

緋炎家はなんか例外らしい
その辺はよくしらないが
興味もないやあんな家

「うん。いいよ涼くんがちゃんと愛してくれるなら」

八雲は決心した顔をしている

「わかった。これは契約だ。
左の薬指を出せ」

何をするんだろうと八雲は不思議そうに見ている

「我、汝を妻としこの体朽ちる時まで愛すを事を誓う
我が使役するシルフに誓う、そして汝にシルフの祝福を」

「なにこれ・・・体中に魔力が・・・すごい、そして私の横にいるの何？」

「それが契約に誓ったシルフだ。なんかあったときそいつが助けてくれる」

「しかし、上級精霊だからほいほい詠んだりするなよ」

八雲は元気「はーい！」って言いやがった信用できねえ

俺は一息つくためにコーヒーを口につけ

媚薬が入ってることを思い出し口に含んだまま

八雲の唇に俺の口を押し付けコーヒーを

流し込んだ

すると八雲の目がとろーんとしだし

「もう、なにをするの・・・がまんできなよ・・・」

甘い声で俺を誘ってくる

そのまま俺は八雲に覆いかぶさった

6話（前書き）

こう言うの書くの初めてなので
いろんな書き方を試してみたいと思います

練習みたいな感じなんで

あたたかい目でみてください・・・

お願いします

あと戦闘描写ってかなり難しいっすね・・・

6話

ピピピーと携帯電話がなった

それを合図に俺と八雲は目が覚めた

どうやら夕方のようなだ

授業サボりまくったな…

そんなことよりも電話にでなければ

「もしもし？仕事ですか？」

「その通りだ。涼。どうやら朱里だけでは詩音だけじゃちょっと厳しいみたいだ

手伝いに行ってくれないか？お前が現場に一番近いんだ」

へえー詩音だけじゃ倒せないってどんな魔物なんだ

すごく気になるぜ

久々につえーやつと戦えるかもしれないのか

これは行くしかないだろ

「大佐。了解しました。朱見涼中尉直ちに現場に向かいます」

と言って俺は電話を切った

「ごめん。八雲仕事入った。本当はもっと一緒に居てやりたいんだが…」

すると八雲は笑顔で「頑張ってきてねだーりん」

などといいやがった

やばいコイツ俺より年上なのに可愛いわ

そんな事を思いながら俺は服を着て

急いで詩音のもとへ向かった

）詩音 side）

「こいつ何なの！めっちゃくちゃ強い。私はblackstar
sの詩音よ！

私は強いの！！だからこんな奴に負ける訳にいかないんだから！！」

詩音は心の中で呪詛のように私は強い私は強いと復唱していた

「詩音さん危険です！下がってください」

後ろで戦闘員Aがなんか言っているけど私は無視して
敵に攻撃を仕掛ける

「奴を拘束せよ！ダークネスバインド！」

しかし、敵はすぐに拘束を時こちらを攻撃してくる

やっぱり私の魔法と相性が悪いから・・・

闇の魔法ではなく火の魔法を放ってみる

「地獄の業火で敵を燃やせ！ヘルズゲート！」

しかし、これも効かない

火の魔法最強のヘルズゲートも効かないなんて・・・

これもダメだ・・・

もうダメ・・・私此処で死ぬんだ・・・

blackstar's失格だな・・・悔しいなあ・・・

「?χω σκoτ?δl (闇よ)」

奴が何かを行った

私の体を闇が包んでいく

ごめんね・・・お母さん・・・復讐できなかったよ・・・
きつと見つけて殺すって誓ったのに・・・

奴が近くで鎌を構えている

私はそっと目を閉じた

「おおー詩音何死にそんな感じになっちゃてんの」
すると何故かあいつがいた

（Main Side）

やばいな戦況がどんなのかわからないから急がないとな
などとぼやきながら
屋根をつたいながら走っていく

しばらくして詩音が見えた
どうやら奴に拘束されている
「こりゃ早く助けないとやばいな」

さらにスピードを上げて詩音のもとへ急いだ

「おおー詩音何死にそうな感じになっちゃんでんの」

「誰？その声涼？」

詩音はとても驚いた様子で
こちらを見ている

俺はとりあえず詩音の目の前にいた死神に蹴りをかました

「Ποιό？（何者）」

「お前を殺す物だよ」

「しかし、詩音死神とはなんとまあ相性の悪いどんまいだぜ」

「とりあえず、そこで見てなすぐ殺すから」

「光の神ヘイルダルよ、我は古き血の血族盟約により敵を薙ぎ払え！」

俺はヘイルダルを召喚しさらに

死神より上位の暗黒神のナイヤルラトホテップを召喚した

圧倒的な力差で死神がダメージを受けていく

「H δ ι κ ? μ α ? α π ? θ α ν ο (ありえない我が)」

「お前は俺の仲間を傷つけた。だから死ね」

ヘイルダルとナイヤルラトホテップに礼いい

俺は「お前は幸せだなこれで死ねるんだぜ」

といいシャイニングトラペゾヘドロンを取り出した

シャイニングトラペゾヘドロンを死神めがけ前に突き出したが
死神はそれを避けたと思えたが

「無理だぜ、このシャイニングトラペゾヘドロンを万物の因果律を
全て変えるからな」

「? v θ ρ ω π ο ι σ α ν ? v θ ρ ω π ο ι (人間ごときに)
と言に残し消えていった

「詩音大丈夫だったか?」と声をかける

すると「大丈夫よ!」と言って帰ろうとする

俺は「ありがとうも無しかよ」と茶化してみるも無視し闇の中へ
消えて入った

俺はため息を付き
自宅へ帰ることにした

6話（後書き）

ギリシヤ語を使っていますが精霊語だと思ってください
お願いしますあと翻訳サイト使ってるんで
ツツコミとか無しでお願いします

7話（前書き）

なんか本当に文才の無さに自殺したくなりますね・・・
PVが13000超えてる・・・ありがとうございます（ノド）
・
・
・

7話

「ただいま」すると誰もいるはずがない部屋の奥から「おかえりなさい」と

返事が帰ってきた

俺は慌てて部屋へ向かった

「なんで八雲がいるんだ・・・あと和葉も・・・」

俺は頭を抱えながら言う

すると八雲は「ほらー私ってダーリンの嫁妻じゃん？妻なら一緒に住むのが普通だと思うんだよね」

「八雲の言い分はわかった。それは認めよう。でもなぜ和葉がいるんだ？」

「和葉ちゃんは今なんかダーリンに言いたいことがあるみたいだよ？先にそれ聞いてあげて？」

和葉はこつちをチラチラと見ながら頬を染めて

「涼くん・・・わ・・・わたしも涼くんの妻にしてください！！・・・」

／／／

俺はフリーズした

「お前言ってる意味がわかってるのか？俺はもうお前の姉を妻にすると言ってるんだぞ？それでもいいのか？」

「構わない！あの時助けられて・・・よくわからない感情が生まれ
て今日お姉ちゃんが涼くんとその・・・しちゃったって聞いてすご

くモヤモヤした気持ちになって気づいたら好きだって気づいたのだから後悔なんてしてないのこの答えに」

俺はそこまで思われてるのかと思い

「わかった。でも八雲にも言ったけど俺は他にも嫁をつくるぞ？それでもいいのか？」

「均等に愛してくれるならそれでいい」

「わかったよ・・・もう何も言わない。」

「じゃあ、和葉ちゃんの初めてを食べちゃって（笑）」

「お姉ちゃん勝手に決めないでよ！私にだって準備とかいろいろあるんだから！」

「すまん、今日はもう疲れた・・・寝かせてくれないか？」

「だゝめ、均等に愛すでしょ？だからちゃんと和葉ちゃんも愛してあげて」

そう言われてはしかたない。

「和葉いいな？あと八雲は絶対にくるなよ？」

「ええー姉妹丼だよ？食べたくない？」

「今度な・・・」

食べたくないといったら嘘である

俺は和葉を連れて自分の部屋へと向かった

「そうだ、和葉。八雲とも契約した。お前も契約するか？言っとくが契約は一生だ。俺から逃げることは二度と出来なくなるぞ？」

和葉は「うん」と即答だった

「わかった。左手の薬指をだせ」

そして俺は

「我、汝を妻としこの体朽ちる時まで愛すを事を誓う」

我が使役するゼピュロスに誓う、そして汝にゼピュロスの祝福を」

「すごい魔力が・・・それとこれがゼピュロス？」

「そうだ、そいつがいつでも力を貸してくれる」

簡単な説明をして俺は和葉にくちづけをした

そして俺は和葉と・・・

翌日

目が覚めるといい匂いがする

隣に寝ているはずの和葉がいないことにちよつと焦り俺は服をきてリビングに向かった

「あ、涼くんおはよう」

「なんだ。朝食作ってたのか・・・目が覚めたら和葉がいないから少し焦ったじゃないか」

「涼くんって意外と子供なんだね」といってクスクスと嬉しそうに笑った

「なんだよ・・・悪いかよ」俺は拗ねたように言う

「いや、意外な一面がみれて余計好きになっちゃった」
こいつは臆面も無くこんな恥ずかしいことサラツと言えるのか・・・
怖いな・・・

「八雲はまだ寝てるのか？」

「お姉ちゃんならもう出ていったよ」

「はやいな・・・あいつの性格だと寝坊して教頭に怒られるって言うのが普通だと思うんだけど」

「お姉ちゃん意外とそういうところしっかりしてるから」

俺関心しながら和葉の作った朝食を食べて
学校の支度をして学校へと向かった

教室に付きクラスメートたちに適当に挨拶して

関に付き八雲をくるのを待った
すると後ろから

「初日に挨拶できなかったな。俺は森達也だ。よろしくな」

すごい満面の笑みで手をさしだしてくる

無視するわけにもいかないだろうから俺も満面の笑みで「朱見涼だ。
よろしく」と返した

「お前どうするの？明日から始まる模擬試合。作戦とか決めてるの？」

「まてまて、なんだそれわ・・・聞いてないぞ？」

「なにいつてんだよ。掲示板に書いてあっただろ」

俺はそんなもの見た覚えも聞いた覚えもない・・・八雲め・・・

「とりあえず、とっても大事なことを教えてくれてありがとう、森」

「達也って呼んでくれよ。俺とお前は親友だろ？」

親友になった覚えはないんだがなんだこの流れは・・・
俺はとりあえず曖昧な返事で「ああ・・・」と返しておいた

「で、親友よ。親友に聞きたいことがあるんだが・・・八雲先生としちゃったのか？ぶっちゃけそこんとこどうなんよ？ほれ、ゲロっちやえって」

「達也、なぜそんな事言わなきゃいけないんだ？いくら親友だろうと言えること言えない事くらいあるだろ」

「そこをなんとか頼むよ！」

そんな様子倒さなくても・・・

「いやだってさ・・・呼び出されたあとお前帰って来なかったじゃんそれで噂になってんだよ。朝八雲先生あんなだったし」

「わかったわかった。言うよ。俺は八雲と結婚するこれで満足か？」俺はみんなに聞こえるように言った言ってやった！

あれーなんで和葉さん不機嫌になってるんですか？

ちよつとその黒いオーラなんとかしてくださいよ

ってか、達也気づいて気づかない振りしてやがるぞ・・・

達也が耳打ちしてきた

「もしかして、和葉ちゃんとも？」

「ああ、その通りだ・・・」

達也は大声で「うそだああああああああ。和葉ちゃんもかよ！姉妹攻略済みかよ！」

するとあたりから「くそ、狙ってたのに」とか「転校生死ね」とかいろいろな罵声が飛んでくる

いくら俺でもちよつと泣きそう・・・ぐすん

でも、頬を染める和葉が可愛いから許すわ

可愛い正義

ガラガラとドアが開いた

「お前らうるさいぞーさっさと座れー」

八雲が一声かけると全員席へと座った

出席を取るのかと思ったら俺との惚気話が始まった・・・

俺は耳を塞いで校門を見ていると黒のゴスロリの姿が目についた

「あれは詩音か？」と思いながらぼーっとしていると

八雲に聞いているの？とか言われて八雲の方に目を向けて

適当に肯定してまた校門の方へ目を向けると詩音はいなくなっていた
あいつなんだったんだろうとか思っているとチャイムがなり

八雲が適当に出席をとり最後に

「明日からの模擬試合頑張ってね！」といって教室をでていった

達也に俺は「模擬試合ってどんな感じなんだ？」と聞いてみると

「トーナメント戦でブロックに分かれて戦ってブロック優勝者でさらにトーナメント戦してって感じだな。あと優勝者にはなんか宝具がもらえるらしいぜ。まあ俺は去年2回戦敗退だからな。そのへんはよくわかんないわ。あと去年の優勝者は緋炎だ」

「そうか・・・」

あのクズが優勝とかこの学校も本当に高が知れてるな

「それと今日の放課後クジ引きで対戦相手決めるから昨日みたいに帰るなよ（笑）」

とりあえず俺は達也を殴り

屋上で放課後まで寝ることを決めたので教室をでていった

屋上に向かう途中あいつにあってしまった

「これはこれはお兄様、どちらへ？」

「ん？屋上だけど。なんか用か？クズ」

おお、こんなことで青筋立てちゃってほんとバカだな

「明日から始まる模擬試合お前と当たれることを心から願うよ」
迅はそう言って自分の教室へと向かった

俺は屋上に付き深い眠りについた

そして放課後

くじびきで俺はCブロック迅はBブロック
戦うことは決勝トーナメントだけとなった

さて、どーっすかなあー

8話（前書き）

主人公が身体強化魔法を使いますが1割が
普通の魔術師と同じくらいです

不定期にも程があるな・・・

8話

翌日になり、どうするかなーと考えていると

八雲と和葉が「「今日優勝してくれるよね？ 私たちの為に！」とか、言いやがってる

「なんでお前ら優勝してほしいの？」と俺は聞いてみると

八雲達は「「私たちの夫なんだから強くなくちゃダメなんです！」といった後に「優勝してくれないなら別れます！」と、ハモリやがった

俺はしぶしぶ「わかった。わかった。優勝するからそんな顔しないでくれ…」

という、八雲達は笑顔になり学校へと向かった

なんで一緒に行かないって？そりゃあ恥ずかしいだろ

なんでこの歳になってさ、一緒に登校しなきゃいけないんだよって感じですよわ

時計を見ると8…00俺もいかないと遅刻する。
駆け足で学校へと向かった。

達也が一番最初に挨拶してきた。

「おはよう。my best friend」

「おはよう。名も知らぬ人」
と返す

「涼くんひどいよーつれないよー」
などとうねうねしている。気持ち悪い

「で、どうすんの？」と達也が聞いてくる
なにが？と俺は惚ける。

わかってるくせにと言いながら達也は自分の席にもどっていった。

八雲が入ってきて、出欠をとり「頑張ってねえ」と
俺に投げキッスをして教室を出て行った。

そして、クラス全員が闘技場へと向かった。

俺はAブロック一回戦第1試合の和葉を、応援するために座席を探
している

知った顔がこっちに手を降っていた

「おい。八雲：仕事はいいのか？」

俺が呆れたように言うと

「仕事より妹の応援のほうが大事に決まってるでしょ！」
と怒鳴られてしまった。

そんなこんな話をしていると、和葉が入場口からでてきて、こちら
に気づいたのか

手を振っていた。

八雲は「和葉ー！がんばれー！まけるなー！」と叫んでいた。隣で苦笑いをしてると、八雲は涼くんも応援しないとなどといって俺の手をとってぶんぶん振り回していた。

そして和葉は、対戦相手を一瞬で場外に落とし勝利した

Cブロック俺の試合開始時刻になり

八雲に行ってくると告げて、待機室へ向かうと
迅が目の前を歩いていった。

「逃げるなよ？兄さん」とだけ告げて何処かへと歩いて行った。

しばらくして、担当の先生に頑張ってこいといわれて俺はだらだらとリングに向かって行く、反対側からも対戦相手が意気込んで入場してくる。

「2－A神谷だ。よろしく」と挨拶されたので、

「2－C朱見だ、こちらこそよろしく」と返し試合が始まった。

俺はまず相手の出方を見るために火精霊を少しだけ集めて
ファイアーボールに似せた火球を神谷に向かって放つ。

神谷風の魔法で火球の方向を変え場外へと流れた。

すぐに使ってくれたおかげで、相手の魔法属性は風。

これがわからないことには、戦いかたがわからないからな。

そう思いながら俺は身体強化魔法を自分にかけて相手の背後に回ると、相手も素早く身体強化魔法をかけて素早く避けた。

流石Aクラスは伊達じゃないな。

手加減しすぎたかな。

相手がこんなモノかという顔に俺はイラっとし

身体強化魔法を通常の1割から3割に変え相手に

縮地を使い相手の懐に入り込み、神拳術攻三ノ型朧月を相手に放つ

相手は苦し紛れに、ウインドカッターを放つが

分身にあたり分身が消え俺は後ろから神谷を気絶させ

勝利を収めた

やっぱ学生じゃ相手にならないな…

とつぶやきリングを降りて2回戦までどこで潰そうかなあと考えていると

後ろから達也が「涼くんの相手じゃないねえーやっぱ学生じゃ。」

と後ろから話しかけてきた

「そうだな」と適当に返すと「ホントつれないなー」と肩をくんでくる

それにつづけて「どうするの優勝するの？めだっちゃうよ？」

「しかたないだろ…あいつらが言うんだから…」

「お前もいろいろ苦勞してんだな…」

「ってか、あんまり俺らが一緒に居るのは不味いだろ。なるべく俺に近づくな。」

もし、用事があるならいつもので頼む」

「まったく、用心深いなあー涼くんはー」

「用心するに越したことはないからな。それで何度痛い目を見たこ

とか」

「そうだな。でも、お前友達作る気無いだろ。だから少しでもクラスに馴染めるようにとな、俺は」

「そういう気遣いはいいから目的を優先しろよ」

「はい、はい。わかりましたーよー」といって達也は目の前から居なくなった

まったくあいつはとか思いながら八雲のもとに戻ると、和葉がいてさっきの試合をよく頑張った。と褒めると嬉しそうにしていたので、頭をなでなですると、

八雲が私もーとかいいしかたないので、八雲もなでなですると、ちよっと動物撫でてみたいで

俺がものすごく和んだ。

さてそれは置いておいて2回戦が始めるな

俺は八雲と和葉に「行ってくる」と告げて2回戦に挑んだ

それからはずっと惰性で戦ってCブロック代表となった

なんで2回戦から省いたって？そりゃ雑魚かったしめんどいしね（

各ブロック代表でさらにくじ引きをして

準決勝の対戦がA v S D B v S Cとなり結果的に準決勝で迅と戦うことになった

対戦結果を八雲と「準決勝で兄弟対決かぁ〜決勝がよかったー」
とかなんとかニコニコしながらいい俺は黙らせるために頭をなでなでした。

となりに和葉がそれをみて和葉もなでなでしておいた。

そして準決勝

「逃げないでここまで来たんだ、兄さん。まあ、俺にぼこぼこにされて

恥ずかしい思いするだけだと思うけど、せいぜい頑張ってください」
本当にこいつは大海を知らない蛙だな…

やっぱり一回出鼻をくじいたほうがいい。うん、そうしよう。
と決意し試合が始まった。

とりあえず俺は出鼻をとことん挫かせるために、迅に本気を出させようと思う。

さて、どうやって出させようか。

身体強化魔法を通常の5割かけ、これで勝てるんだが迅の攻撃を全て避ける

俺が使えなかった火の魔法ばんばん撃ってきやがる

いいねえーいいねえー

流石エリート君ふつうとはちがうねえー

威力が違う。掠っただけで溶けそうだわ。
まあ、当たらないけどね。

10分くらいやってると向こうもイライラしてきてるみたいだ
ファイアーボールとフレアストームだけで、倒せると思っていたよ
うだが

倒せないから顔が歪んでいる。

やばい、楽しい(笑)

迅がイライラの限界だったらしく

「兄さん、そろそろ逃げるのやめて攻撃してこいよ」などいろいろ煽ってきた。

どうやら俺を苛立たせる作戦っぽいが、そんなのにのるほど馬鹿じゃない。

しかし、面白いからあえてのるそれが俺

「積年の恨み腹してやるわー！」と棒読みで突っ込んでいくと

迅は最上級魔法のアルティメットフレアを唱えていたらしく

俺はちよつとみすったかなと、苦笑いして身体強化魔法7割に上げ
なんとか避けたが、

左腕が無くなっていた。その事に迅は嬉しくなったらしく

「ざまあないね。兄さん。これでトドメだよ。」といってファイアーボールを唱えた瞬間

ビービービー

と警報がなった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0717t/>

sevenstar's

2011年7月7日13時59分発行